

『職業訓練』1965年8月号（労務労政研究所）

新しい産業教育方法の方向

全国プログラム学習研究連盟委員長 矢口新

昔から技能の教育は独特の方法があるとされてきた。手に職をつけるなどといって、身体でおぼえなければならぬとされていた。身体でおぼえるというのは、頭を使わないというようなことであろう。ひとりでの手がうごく、身体がうごく、無意識の間に働く意識ゼロの間に、手が動くということである。そういう境地に達するには、独特の訓練がある。相撲のけいこでもそういうことがいわれる。基本技を一つ一つ身につけて行く。はげしい訓練の結果、一つ一つ積みあげられて行って、それらがやがて、神技に入る段階にも達するとされてきたのである。

しかし考えてみると、それは単に手や腕や身体の訓練ではあるまい。手を動かしているといっても、やはり頭の働きが伴うであろう。身体が一瞬の間に、意識ゼロの境地に動いているといっても、やはり頭脳の反応力であろう。それが物凄いスピードで、身体の各部に指令を発するのである。やはり頭脳の働きを訓練して、そういう境地にまで達するのである。

大脳細胞の働きのスピードは千分の一秒単位ではかる程早いのである。そのスピードが一瞬の技能をつくり出すのである。しかし技能ばかりでない。考えるという働き、身体の部分を使用しない働きも、同様なのである。

どうしてこれまで、考えるという働きにスピードが考えられなかったのであろうか。頭の回転が早いなどということがいわれていたにかかわらず、その早い回転を訓練するということが考えられなかったのであろうか。無意識の間に身体が動いて神技をつくり出すよ

うに、意識ゼロの間に頭脳が動いて神想（?）、神の如き思考を生み出すというように考えなかったのであろうか。そうなれば、思考の訓練ということも、もっと進んでいたであろうに、やはり抽象的な思考というようなことは一般にわかりにくいことであつたのであろう。

新しい産業教育方法というような題を与えられたが、新しいというものが突如として生れるということはあるまい。われわれのこれまでやってきた教育訓練の方式をさらに科学的に、合理的に考え直すということ、これまで科学のメスが入っていなかった所へ科学のメスを向けてより合理的に考えるということによって、新しいというものが生れるのであろう。

そのように考えると、産業教育訓練には、大変により技術、技能教育の伝統があるのである。それは技術や技能の現実の必要性から必然的にとられざるを得なかった頭脳訓練の方式をもっている。それを頭脳訓練と自覚してやったというよりは、身体の訓練としてやったのであるが、それでもよい。その方式は科学の光に照らしてみても全く進歩しているのである。基礎的なものを次第次第に積みあげて、スモール・ステップで進んでゆく、それは学ぶ者自らの努力において勝ち得られてゆくのである。まさにラーニング・バイ・ドゥーイングであつて、なしたことに応じて、学習が成立して行っている。

現代一般の教育は決してそうではない。いわゆるオーソドックスな教育、頭の教育といわれるものは、頭脳の訓練を全く忘れている。教師の説明を一回聞いて

矢口新ライブラリー 05520 新しい産業教育の方法

わかればそれで教育になると考えている。そういう教育では、人の能力を育てることはできないというべきであろう。つまり考えることのできる人間は、そんな教育ではつくられまい。技能をふるう人間は訓練によって生れるように、思考を働かす人間も訓練によって生れるのである。教師の説明を聞いてわかるなどということでは、生れないのである。

今や人間能力の開発ということは、民族の将来を決する大きな問題となりつつある。産業の世界で最も早くその兆候があらわれて来ている。本物を考え、本物

のことに実践し、本当のものを創り出す人間の頭脳を開発することが急務となりつつある。

そういう教育を生み出す基盤は、産業技術教育の伝統の中にひそんでいることを忘れてはならない。プログラム学習ということがいわれるが、その最も近い親類は、実は伝統的な技術、技能の教育の中にある。

一般の教育から受けた悪い影響を払いのけることによって、産業技術教育は新しい時代のホープとなるであろう。